サクラの舞うこの場所で

★蒼夜★

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サクラの舞うこの場所で

【Ｎコード】
Ｎ６７３４Ｏ

【作者名】
★蒼夜★

【あらすじ】
８年前、高校卒業と共にある約束をして互いに別々の道にすすんだ凛華と涼夜。凛華は親友の結婚式に出席するが、そこには涼夜の姿もあり…
約束と涼夜をまえにして凛華がとった行動とは！？

招待状（前書き）

はじめまして
初投稿です！！
右も左も分からない初心者なので皆さん叱咤激励お願いします

招待状

あの日
あの時
この桜が舞い散る
この場所で
わたし達は
叶うかどうかも
わからない
約束をした

＊＊＊＊＊＊

「凛さん、今日はあれていますね…」
「あぁ…マスターに任せておけばいーだろ。でも、こんなにもあれるのはめずらしいな。」

そう話した後
お互い自分の持ち場に着こうとしたが凛とした透き通る声に呼び止められた

「あら！？タツにユウマくんじゃない…そんな恐いもの見た顔してないでお話しましょ？」

そう言ってこちらを見る女性の目が
（あんたらが人の話をしてることぐらい分かってんだよ。ちょうどいいからストレス解消の為に一肌脱げや！！）
と物語ってるのは気のせいではないだろう…

招待状（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
初っ端から視点が…
次回からはちゃんと主人公・凛華の視点で物語は進みます。

招待状？（前書き）

凛華が凛と呼ばれていますが、凛華は普段自分のことを周りに【凛】と呼ぶようにさせています。

招待状？

「凛さんのお話相手に指名されるなんて光栄です。」

そう言いながら近づいてくる男・タツはヤレヤレといった足取りである。

それにしても、営業スマイルどうにかなんないのかしら？

まぁ、私も普段から作り笑いの方が多いから人のことはいえないんだけど…それにしてもビミョーな笑顔ね。やるからには最上級の作り笑いにしなさいよ。

「そんなこと言って、本当は厄介なのに絡まれたとでも思ってるんでしょ？」

「ははっ！よく分かってるじゃないですか。」

認めた…このお店の教育はどうなってるのかな？ん？

「素直になったわねー」

「素直もとりえの１つですから」

「そう。なら早く、その胡散臭い作り笑いはやめてくれない？」

「凛さんはこの笑顔が本当に嫌いなんですね…」

なにを今さら

「ええ、大嫌い！マスターおかわり。」

「はい、お水どうぞ。」

なんで？と顔にでていたらしくマスターが説明してくれる。

「いくらお酒に強いからといっても凛さんは、１時間で３本もあけているんですよ。身体に悪いです。」

う～商売上がったりになってもしらないんだから！

招待状？（後書き）

携帯投稿でいまいち機能を理解していません。
色々と時間がかかりますが気長に待っていただけると嬉しいです。

展開が遅く、短文のせいでもあるので次は中文ｏｒ長文でいきます！！
文章力をもっとつけるよう努力します！！

招待状？（前書き）

長文はムリでした…
少しずつ長くして一定の長さに近いうちにはします！！

招待状？

目の前に置かれた水をいっきに飲み干す。

「いい飲みっぷり。」

それを見ていたタツがボソッと呟く。

「それでは凛さん、いったい何があったんですか？相談にのれるかもしれません…1人で抱え込んでやけ酒するより、スッキリするかもしれませんよ？…なんなら、愚痴でもかまいません。」

マスターの言葉に私はグラスのふちを指でなぞり、目線を落として少しの沈黙のあと口を開いた。

「高校時代からの親友がね、来月結婚するの。結婚は祝福しているし、式にも絶対に行くわ…ただ……招待客の1人にある人がいるの。その人から出欠席の連絡がなくてどうなるのかは分かんないらしいんだけど…」

「凛さんはそのある人に会いたくないんですか？」

その言葉になんて返したらいいのか分からず、曖昧に笑うしかなかった。会いたくないというと嘘になるけど、どんな顔でどんな話をすればいいのか分からない。

いや、話す必要はないのかも…なんにせよ、不安なのだ。

「流れに身を任しちゃえばー？」

それまで黙って聞いていたタツの言葉に顔をあげる。

「こっちが会いたい、会いたくないて思っても相手が出席するか分かんないんでしょ？会わなかったら会わないで楽しめばいーし、会ったら軽く挨拶して仲のいー子んとこ行くなり、どうにかなるでしょ！なんとかなる！！」

なんていい加減なんだろ他人事だと思って…

「いい加減ね。」

「適度にいい加減になった方が楽しいですよ。」

「……フフ…そうね…そうかもね！！」

【なんとかなる】

そう、思い出した。

あの人の口癖だわ。

私はそのいい加減な言葉になんて無責任なんだろうと思う反面、安心してしまうのよね…

「なんとかなる。」

口にしてみると憑き物がおちたようにストンと私におちてきた。

「マスター、タツありがとう。」

「凛さんに笑顔がもどってよかったです。」

「どーいたしまして。」

2人の笑顔と言葉につられて笑みを深くする。

「今日は本当にありがとう。そろそろ帰るわ、御馳走様でした。」

お金を払い、外に出るとキレイな満月がうかんでいた。
鞄の中から親友・美紀から渡された結婚式の招待状をとりだす。

「大丈夫、なんとかなるわ。そうだ！！明日は新しいドレスでも買お～っと！！」

軽い足取りで家路を歩くのであった。

招待状？（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
次回は結婚式になります

結婚式～再会～（前書き）

遅くなりました。

涼夜の登場シーンでパターンがいくつかあり作成しては消し作成しては消しを繰り返してました。

結婚式〜再会〜

———軽く挨拶して仲のいー子んとこ行くなり……なんとかなる！！

ならなかったわ…

＊＊＊＊＊

私は新しく買ったドレスを着て、結婚式に出席していた。
披露宴では、美味しい食べ物に集中していたがフッと目の前の席の人が、まだ来ていないことに気づく。

いったい誰がくるんだろう？もしかして……まさかね…

私は食事を中断し、
今日の主役である花嫁・美紀にお祝いの言葉をつげ、先程の疑問を聞く。
「さっきから気になってたんだけど、私の目の前の席の人がまだ現れないの…いったい誰がくるの？」
「それはね〜ヒ・ミ・ツ…それにしても、遅れることは聞いてるんだけど遅い！！あのバカ涼夜めッ！！！！！！！……あっ…」
「…涼夜が来るの？」

「…私のばかー……。」

美紀はハァ～と息を吐き出すと私の目を見て話しだした。

「一昨日、出席の返事がきたの。余計な事してると自分でも思う…けど、こうでもしなきゃ凛華は前に進めないと思うんだ。今まで、彼氏ができても凛華…どこか冷めてる感じがしたし、寝言で涼夜の名前を言ってるんだよ！？」

自分でも知らない事実と涼夜が来るという事実に頭が追いつかない。ゆっくりと頭の中を整理しながら話す。

「わざと、私には座席表の載ったパンフレットを渡さなかった。…涼夜が来るって分かって、私が欠席しないようにするために…手違いで数が足りないなんていうのも、もちろん嘘。」

そうでしょ？と言えば、美紀は決まりの悪そうな顔をしてから頷く。

「……」

「……」

「それで、涼夜は何時になったら来るのかしら？」

「予定では、もう着いているんだけど…仕事が長引いてるのかもしれない。」

「そう。…疑問も解けてスッキリしたし、私は席に戻るわ。」

そう言って私は食事を再開した。

いつ涼夜がきてもおかしくない…自分でも聞こえるほどに心臓がバクバクとなっている。フォークとスプーンを持つ手が震えて食事どころではない。
気持ちを落ち着けるため外の空気を吸おうと会場をあとにする。

外に出ると、少し肌寒いが気持ちが落ちついていった。
秋になったばかりとはいえ、風邪をひいても困るのでホテルに入ろうとした時だった。一台の黒塗りのベンツが目の前に停車し、髪はワックスで後ろに流しサングラスをかけている長身のスーツ姿の男が降りてきた。

私はその男の正体に気づくとホテルの中へと走りだしていた。エレベーターのボタンを押し、後ろを振り返ると男がこちらに向かってくる。
早く早く！！と何度も心で唱え、エレベーターが開くと急いで乗りドアを閉める……が、ギリギリで男が乗り込んできた。

なんていうことだろう…逃げきれると思ったのにな～神様がいるなら呪ってやるわ。

「久しぶりだな、凛華。」

そう言ってサングラスをとる男を睨みながら

「ほんと、久しぶりね。元気だった？元気ね！私もよ！それではサヨウナラ！！」

エレベーターの扉が開いたので降りると右腕を引っ張られ、エレベーターの中へと戻される。

男は私を抱きしめ、私の耳に囁く。

「涼夜…」

———呼んで、凛華。俺の名前を…呼んで……

結婚式～再会～（後書き）

ついに【再会】しました。美紀との絡みが大半をしめてる……
次は凛華＆ａｍｐ；涼夜の絡みで終わります。

キスとそういう類の台詞が入ります。
やさしい軽めにしますが、どこからどこまでがＲ１５なのか分かんないので時間がかかるかも…

結婚式～不敵な笑みとため息～（前書き）

キス程度で終わります。

結婚式～不敵な笑みとため息～

どれくらいの時間、抱きしめられていたのだろう？

「いい加減に離してくれないかしら？」

私を抱きしめる腕の強さが増した。

だからといって苦しくはなく、流石というべきかなんというべきか…

「私の言った事ぐらい理解できるでしょ？私は離してと言ったの。」

さらに力が増した。

「…今は逃げないから。だから離して？涼夜の顔を見て話したいの。」

力が緩められ、私は涼夜の腕を外す。

涼夜は真剣な表情（かお）で私をみている。つい、目線をそらすと顔を上げられた。

「何故そらす？顔をみて話したいと言ったのはそっちだろ？ここで話すのもなんだな…部屋をとってある。」

そういうとはやいのは昔も今も変わらない。

部屋だなんて行くわけないじゃない！思い通りになんてならないわ！！

「私の話はすぐ終わるわ。ここでも充分よ。」

エレベーターは最上階の２０階を目指しのぼり続けている。

このホテルの最上階のＶＩＰルームは普通の部屋の４つ分の広さでネオン街に沿った壁は窓ガラスになっており、そこから眺める夜景は大人気で大統領や首相、世界的スターなど各国を代表する方々がプロポーズなど記念となる日に、この部屋をと望む者も少なくはない。そのため、５年先までキャンセル待ちという状況だ。

その部屋へと行くのだろう。いったい、どんな手を使って予約をとったのかは聞かない方が身のためね。

「もう着いた、諦めろ。」

エレベーターの扉が開くと肩を抱かれて降り、部屋まで歩く。

ここまでくると、もーどーにでもなれッ！！といった投げやりな気持ちだ。

部屋に入ると同時に噛みつくようなキスをされた。逃げようとすると後頭部をおさえられ、更に激しくなる。それでも私は舌を絡めまいと逃げるが絡められてしまう。

どんな舌よ！？

頭が真っ白になってきた。身体の力が徐々に抜けていき、膝がガクガクとなる。

腰がぬけそ…あれから遊びまくったわね！ただでさえ上手なマセガキだったんだからテクを磨いたりする必要はないでしょ！？…あぁ、もうだめ――

腰が抜け、その場にしゃがみ込みそうになるが涼夜が支えてくれた。私はそのまま、されるがままに身を任す…体に力が入らないのだ。お姫様だっこで部屋の中へと移動する。柔らかい感触に閉じていた目を開けると、ベットに寝かされていた。急いで起き上がろうとするが覆い被さってきた。両腕を頭の上で抑えられ、足の間に涼夜の足が入り込んできたため身動きがとれなくなってしまう。どうすることもできない私は涼夜を睨みつける。涼夜もまた私を見つめていた。しばらくして重く口を開く。

「どういうつもり？」

「どう…とは？」

「とぼけないで！！」

「このまま、おまえを抱く。おまえの全てをもらう…約束を忘れたわけじゃないだろうな？」

約束という言葉にドキッとする。しかし、表情にはださない…我ながら天晴れなポーカーフェイスだと思う。

「私のすべて？馬鹿言わないで…抱きたいなら抱けばいい。けど、わすれないで！私には他に大切な人がいることを！！」

再び睨みつける。涼夜は口角をあげ笑う。

「なら奪うまでだ。」

ドレスを脱がされ、下着姿となる。

目を閉じて顔を背けるが戻されてしまう。

「目をそらすな。声も我慢しなくていい…と言っても出ちまうだろうが……」

不敵に微笑むのをみる限り、長い夜を過ごすことになりそうだなと思い、つい溜息がでそうになった。

結婚式～不敵な笑みとため息～（後書き）

微妙な終わり方ですみません。次回は回想シーンでキスより先の性的表現があります。

感想等をくださると嬉しいです。

結婚式～一時の甘さとチャンス～（前書き）

更新がなかなかできず、すみません。
前話の題名を変更しました。内容はそのままです。

結婚式～一時の甘さとチャンス～

あたたかい…
それになんだか気持ちいい……

重たい瞼を上げると胸板があった。鍛えられているなぁ～と手でペチペチと叩いていると

「叩いても何もでないぞ。」

頭の上から聞こえてきた声に顔をあげると呆れながらも、どこか楽しそうな顔の涼夜がいた。

「何時？」

「13時を少し過ぎたところだ。」

どうりでお腹が減っているはずだ。それにしても、よく寝たわ。
お昼食べよう…たしかテーブルの上にルームサービスのメニューがあったはず。
ベットから降りようとすると腰に手が伸びてきてベットに戻されてしまう。

「どこへ行く？」

「ルームサービスを頼みに行くだけよ。少し遅いけどランチにしようと思って…だから、この手を離してちょうだい。」

そう言って手を離そうとするが離れてくれない。
こいつ…

「ちょっと！！いい加減にしてよ！！！！！」

「空腹なんか感じてる暇なんか無くしてやる。」

半ギレ状態の私とは反対に冷静に言う。
文句を言おうと口を開くとキスをされ、舌まで入ってきた。クチュクチュと音が部屋中に響き渡る。その間も涼夜の手は愛撫を忘れない。左胸を下から包みこむようにして揉みくだす。

「…ん…ふぁ…んぁ…」

口から時々漏れる声に手を口にあて、声を我慢していると

「我慢するな。素直に感じろ…昨夜のようにな。」

そう言うと同時に涼夜が入ってきた。明け方まで愛されていた為か、難無く全てが収まってしまう。

「あっあぁ…んッ…やぁ…」

短時間で嫌という程、味わされたせいか身体が快楽を求め、抵抗する気にもなれず快楽に身を委ねた。

＊＊＊＊＊

チャプチャプと水の音がし、目を開けると目の前に胸板があった。
なんだか起きると胸板がある率高くない？
私はお姫様だっこの形でお風呂に入っていた。

「目が覚めたか。」

「覚めたかじゃないわよ。いま何時なの？私、どのくらい気失っていたの？」

睨みながら言う。

「今は１９時３０分ぐらいだで気絶して1時間ぐらいだろ。」

私が最後に時間を確認して抗議したのが、１８時２０分でその後の記憶がない。

「それよりも飯にしよう。和・洋・中のどれがいい？」

だるい…お腹は空いているには空いているけど、動きたくない。

「いらない…」

「なら和食にする。」

「寝させて…」

「食べてから寝ろ。」

「……」

「……」

「わからずや。」

「強情者。」

その言葉そのまま返すわ。のぼせそう……そろそろ出たいけど、身体が重い。

「のぼせそう…身体が思うように動かないの、運んで？」

「夕飯食うならな。」

いい性格してるわ。

「分かったわ、食べるから早く運んで…冗談抜きで頭がクラクラしてきたの。」

その後の行動は早かった。お風呂から出た私は案の定のぼせていた。ソファーに座った私は口移しで水を無理ヤリ飲ませられ、落ち着いた後、ご飯を食べた。

食後はずっとテレビを観ていたが、涼夜の携帯が鳴った。舌打ちをしてから携帯を手に取り、隣の部屋へと移動する。

計画を実行するには今しか無いわ！！

迅速かつ静かに必要最低限の荷物をもち、部屋をあとにする。廊下には誰もいなかった。

部屋にあったジュースをドレスの胸元近くにかけ、スタッフルームへと入る。休憩中らしきスタッフがこちらに気づき近づいてきた。

「お客様、申し訳ありません。こちらはスタッフルームとなっております。」

「すみません…」

そう言って目線を落とし、手を胸元へとやりスタッフの視線を胸元へとやる。

こちらのやりとりを見ていた女性スタッフがスーツを持って近づいてくる。

「余計なことかもしれませんが、着替えをよろしかったらどうぞ。サイズがあうといいのですが、そのドレスでいるよりはよろしいかと…」

「ありがとうございます。重ね重ねすみませんが、着替えをさせてほしいんですけど…」

もちろんです。と笑顔で通された部屋で着替えをすませる。このホテルのスタッフルームにはスタッフ専用階段があり、ホテルマニアである私がそのことを知っているのは当然であり、それを利用するのも当然というものだ。

気づかれないように移動し階段を降りる。階段は非常階段と大差がなく、音をたてないように気をつけながら駆け下りる。1階に着くと、2つ扉があった。非常口とスタッフルームにつながっていると思われ、迷いなく階段を下りて突き当たりの扉を開く。

大正解〜…でも安心するのは早いわ。

少し離れた所でタクシーを拾う。
さぁ、もうひと頑張りよ！！

結婚式～一時の甘さとチャンス～（後書き）

回想シーンではなく、リアルタイムになっちゃいました（｜｜；）
Ｒ１５大丈夫でしょうか？超えてるよ！！と思われた方は、お手数ですが連絡下さい。

逃亡～恐怖心と好奇心～（前書き）

長い間、更新できなくてすみません。
今回は凛華の意外な一面がおもです。

逃亡～恐怖心と好奇心～

逃げきれるとはおもってないわ……

けど、わたしはまだ捕まるわけにはいかないの。

＊＊＊＊＊

タクシーに乗って窓の外を眺める。いつの間にか、雨が降り始めていた。

これから、どうしようかなあ…私がいなくなったことに気づいて探し回ってるよね。自宅には部下が来て見張ってるだろうし……関係ない人を巻きこむわけにもいかない。

途方にくれて、窓の外をボーっとみているとレンタカーのお店があった。

そうだ！いーこと思いついちゃった！！

私はタクシーから降りるとさっきのお店に行き、車を借りる。

とりあえず、青森県ね…

本州の最北端から最南端まで車の旅をするのだ。一度やってみたかったんだよね～日本列島縦断の旅！！本当は北海道とか沖縄にも行

きたいんだけど、車じゃ行けないし…
しょうがないことだけど、やっぱり物足りないわ……でもお金の心配がいらないことに関しては助かったわ。

所持金は３０万。結婚式の前に仕事の依頼人（クライアント）から報酬で２５万を現金で受け取り、駅のロッカーに置いてきたのだ。下手に銀行からお金をおろすとバレる可能性大なのよね…涼夜のことだから、ちゃんとおさえちゃってるだろうし……

でも実は

こういう状況はけっこう好きなんだよね～

なんていうか、何時何処で現れるか分からない敵から逃げながら日本列島本州縦断！！そしてお金は３０万のみで移動手段はレンタカーの軽自動車。

面白い…面白い…おもしろいわ！！

私って昔からこうなのよね～なんていうかスリルマンテンなのに弱いのよ、これが。チキンなのには違いないのよ。怖いものは怖いし、逃げたいって少しでも思ったら逃げるわ！！
今だって捕まりたくないし、誰が涼夜のまわし者なのかも分からな

くて神経も使う。疲れるし、人間不信になりそうで怖いわ。そう、怖いのよ！！

けど……

けどね……

面白そうなのよ、これがッ！！こんなこと、そうそうあることじゃないなんだから逃(のが)したら、もったいないわ！！怖さを上回る面白さッ！！！！

たまらないわッ～！！！！！！！！！！

逃亡～恐怖心と好奇心～（後書き）

私の中の凛華が崩れた！！と友達に言われてしまいました（｜｜；）

皆様はどうでしょうか？今後の話の都合上、こういうキャラで書いていきます。

１つの話を２つに分けました。題を考えると２つに分けた方がいいかなぁ～と・・・そのため、次回は短いです。本当に短文です！！明日、更新します。

逃亡～どちら様ですか～（前書き）

宣言どおりの短文です！！
新キャラの登場～★

逃亡～どちら様ですか～

なんて悶えてるうちに駅に着いて、ロッカーにむかって歩いているとロッカーの前に人がいた。

誰だろう？と警戒しつつ歩いていくとスーツ姿の男がこちらに気づき近づいてきた。

「榛原凛華（はいばらりんか）さんですね。初めまして、社長の秘書の有馬（ありま）といいます。大人しく、私と一緒にきてください。」

そう言う有馬という男に無言で笑顔をかえす。そして回れ右をして猛ダッシュ！！

早くない？？早すぎでしょ！？なんで駅のロッカーて分かったの？しかも、あとをつけるんじゃなくて先回り！！

後ろを振り返ると誰もいなかった。

車に乗り、エンジンをかけるとフッと嫌な感じがした。

おかしい…おかしすぎるわ。こんなにもあっけなく逃げれるなんて……何を考えているのかしら？ハンドルを握る手のひらが汗ばむのを感じる。

「発車しないの？」

「だって簡単すぎるもの。罠かもしれ……」

そこまで言ってから、私はロボットのように後部座席をふりかえる。

そこには、スーツ姿の長い髪の毛を緩くまとめている女性……？
？……男性がいた。

ツッコミどころ満載だが、とりあえず

「…どちら様ですか？」

逃亡～どちら様ですか～（後書き）

あと1話は今年中に更新する予定です！！

逃亡～例外はつきもの～（前書き）

長い間、更新できずにすみません。

1月・2月は学校強制の検定が3つ3週連続であるため次話も遅くなります。

逃亡～例外はつきもの～

何故こうなったのかしら……

「キァ～～ッ！！！すごいすごい！！お城みたーい！」

目の前の目を輝かせて興奮している人物は男なのだ。中性的で一見、女性のように見えても正真正銘のオトコなのだと、心の中で復唱する。

「こんなお城みたいなホテルがあるなんて…しかもドレスやタキシード姿の人がおおいんだけど、どこぞの金持ちっていうわけでもなさそうだし、どうなってるの??」

「このホテルは、ドレスとタキシードの無料貸し出しをしているんです。それに伴う装飾品類もです。そして、気に入れば買い取ることもできるんですよ。……優弥さんも着てみますか?」

その言葉に優弥は俯き、肩を震わしている。

「あのー……優弥さん?」

「……る……わ…」

「はい！?もう一度言ってほしいんですけど、もう少し大きめの声で。」

「絶対に着るに決まってるじゃないっっっっっ！！」

大きな叫び声に周りのお客さんが何事かと、こちらを見る。

「あぁ……王子様、アタシはここにいるわ〜〜はやく見つけだしてぇ〜〜〜！！」

もーほっとこうかしら……

ため息をつくと、部屋の鍵をうけとり歩きだす。その後ろを優弥がついてくる。エレベーターに乗り、最上階を目指す。

部屋に着き、一通り中の様子を見て回る。問題は何もなかった。優弥はしばらく窓から外をみていたが、突然「あっ！」と叫ぶと

「凛ちゃん！アタシ、今からドレスに着替えてくるわ！！女王（クイーン）様になってくるから〜〜」

そう言って部屋を出て行く。

私は、寝室にあるベッドにダイビングして横になり目を閉じると、これまでをふりかえった。

＊＊＊＊＊

「どちら様ですか？」

目の前の人物はニッコリと笑いながら

「アタシの名前は槇原（まきはら）　優弥（ゆうや）よ。優と呼んでね☆」
と最後にウインクをして自己紹介終了。
これは１つ１つ質問しないとダメかしら？
「涼夜の部下ですよね？」
「ええ、そうよ。」
「右腕的存在？」
「ざんねん、左腕。」
「カレー派？シチュー派？」
「シチュー派。」
「文系？理系？」
「体育系。」
「恋人は？」
「現在募集中。」
「涼夜の命令は？」
「絶対とは限らない。」

「なぜ？」

「俺が気に入らなかったり、気分がのんない時は従わない。」

「女の子と男の子のどちらかを誘拐するとしたら？」

「子供に興味ない。あと、誘拐はしない。デートはするけど…」

「女性と男性のどちらかとデートするとしたら？」

「オトコ。」

「女性には興味ない？」

「今のところは。」

「男を今すぐ紹介したら見逃してくれる？」

「イイ男？」

「もちろん。」

「本当に？」

「ええ。」

「本当かどうか、目をみせて。」

そう言って、視線を絡ませてながら優弥の顔が近づいてくる。

クスッ　　と優弥が笑うと私に触れるだけのキスを唇におとす。

「本当みたいだけど、その条件はのめないよ。」

一瞬呆気にとられたが、気をとりなおす。

「女には興味ないんじゃないんですか？」

「興味ないからといってキスやそれ以上のことをしないわけじゃない。それに私、凛ちゃんに興味でちゃった。……何事にも例外はあるのよ。」

ずるい人ね……しかも、オンナ口調が似ててヤだなぁ…

私があまりにも悲愴感を醸しだしていたせいか、優弥さんは申しわけなさそうだった。

「ごめんなさいね……ところで、何処かに行こうとしてたじゃない？何処に行こうとしたの？」

その言葉に悲愴感が増す。

「本州縦断の旅。」

「……本州縦断の旅。」

それから暫くの間、無言による静寂な雰囲気が車内を支配する。

それを破ったのは、優弥だった。

「行きましょうッッ！！！！！」

「えっ！？」

「やるのよ！！本州縦断の旅！！！楽しそうじゃないッ。」

本気かしら？それに私を連れ戻しに来たはず……

「ふふッ…何事にも例外はつきものよ。ねッ？？」

【涼夜の命令は絶対ではない】

逃亡～例外はつきもの～（後書き）

久しぶりに書くと自分の中のキャラがあやふやで大変でした…

まだまだ新キャラは登場しますが、個人的に優弥が大好き！！なので書いてて楽しかった（笑

誤字があったので修正しました。２月１２日

悲壮感（悲しくも勇ましい）⇒悲愴感（悲しく痛ましい）

逃亡～お姉様とお姉様～（前書き）

長い間、更新できずすみませんでした。

理由としては、検定・文章がうかばない・携帯の故障・宮城県にいる親戚と連絡がとれずにいたため、安否確認に専念したかったためです。

無事、親戚とは連絡がとれました。

なので、執筆に集中していきます！！

逃亡～お姉様とお姉様～

――――…り……ん…おきて……りん…

「んっ…りょーやぁ…？」

上半身を起こし、目をこする。

「ふふっ……寝ぼけてる時の凛ちゃんの声って色っぽ～い。でも、優弥て呼んでほしかったわ～。」

その言葉に、もう一度寝ようと横になった私は勢いよく起き上がる。そして、目の前の人物を見て固まってしまった。

優弥は淡い朱のドレスに碧のピアスに髪の毛は綺麗なストレートヘアーだった。

「どうかしら？」

「似合ってます。すごく……きれい。」

優弥は本当に嬉しそうに微笑むと

「次は凛ちゃんの番よ！！」

と私の腕を掴むと歩きだす。

「えっ！？ちょ…ちょっと待ってください！！」

連れてこられた場所はドレスやタキシードなどを貸し出しているフロアだった。

「ようこそお越しくださいました。ご案内させていただきます、私(わたくし)、加藤と申します。」

メイド服を着た可愛らしい女性は流れるような動作で近づきお辞儀をする。その所作の一つ一つに流石だな～と感心していると優弥に手を引かれ歩き出す。

「凛ちゃんは、可愛い系より綺麗系よね…お姉様だとキャラ被るし～…ん～あ～～…しょうがないけど、お姉様でいきましょう！！やっぱり、その人の味がでる方がいいし。」

「フリフリやリボンなどじゃないなら、何でもいいです。」

「それでは、こちらの部屋はどうでしょう？」

その部屋には大人の色気を全面的に醸し出したドレスがたくさんあった。

「あら？この部屋、私が案内された部屋と違うのね。」

「はい。同じ系統でも、いくつかの部屋があります。優弥様の場合、男性の方ということもあり、鍛えられていますし、身長も女性平均と比べると高いため、凛様とは違う部屋になったと…」

「それにドレスのデザインも私好みのシンプルでフリフリはない…
その点も違う部屋の理由なんじゃないかしら？」

私はそう言って加藤さんの顔をみると、加藤さんは笑顔で頷いた。

そのあとは、3人で談笑しながらドレスや装飾品を選んでいった。

逃亡～お姉様とお姉様～（後書き）

今日中にもう１話ｕｐします。

逃亡～壁の花と仮面の男～（前書き）

予約掲載設定で日にちを間違えていました。

なにが今日中にもう１話ｕｐするんだ！！ですね…

逃亡～壁の花と仮面の男～

東京ドームぐらいの大きさのホールでは中心でダンスを踊ったり、コの字型で料理が並んでいて、立食形式のパーティーが行われていた。

宿泊客のほとんどが参加していて、老若男女問わず、ほとんどの人の視線の先には女性より少し高めの身長の女性……男性である優弥だった。

お相手はもちろん男性。なにが楽しくて男を相手にするのかと聞けば、

『あら！？楽しいわよ～女だと思って踊りの最中に身体を近づけてくる奴に、いい想いをさせておいて最後に男だとわかったときの顔！天国から地獄に堕ちたかのよう…』

やってることは小さいお茶目なイタズラでも質が悪いわね。

それを聞いた人は『小さいお茶目なイタズラ』ですます凛もまた、敵にまわしてはいけないと心に留めるだろう。

優弥と相手の様子を眺めていると、目の前にワインが入ったグラスがさしだされた。

さしだしてきた相手を見ると、タキシード姿の鼻から上を隠す仮面をつけた男だった。

「貴方のような人が壁の花と化しているなんて、周りの者は何をしているんでしょうね。それとも、あなたに近づいてきた男は全員、

あの男がわざわざ相手をして追い払っているのですか？」

そう言った仮面の男は、視線を中央で踊っている優弥へとやった。

「……女性の間違いですよ？」

「いいえ、あれは男です。体つきからして違います。」

驚いた！！まさか優弥の女装を見破る人がいるなんて……

「どうしました？」

驚きで仮面の男を凝視していると、不思議に思ったのか首を傾げてきいてくる。

「…いいえ、なんでもありません。」

「そうですか？……もし、よろしかったら一曲踊りませんか？」

突然の申し出に驚きはしたものの、やっぱり…と思う。チラッと優弥をみるとこちらを見ていたが、視線が合うとニコッと笑うだけだった。

どうしようかしら…？最近、踊ってないしな～

「ええ、お願いします。」

仮面の男が笑顔でさしだしてきた左手をとりながら、笑顔をかえした。

逃亡～壁の花と仮面の男～（後書き）

さて仮面の男の正体は！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6734o/

サクラの舞うこの場所で

2011年4月12日13時59分発行